

英雄はいらない

航空支援集団司令官

空将 織田 邦男

1 英雄はいらない

「危機を未然に防止する者は、決して英雄になれない」という言葉がある。安全も同様だ。事故を未然に防止した者は、決して英雄になれない。だが、我々には英雄はいらない。大切なことは事故を未然に防止することだ。

溺れかかった人を助ける英雄よりも、あらかじめ泳力を鍛え、あるいはライフベストを準備し、用意周到にして溺者を出さないことが我々には求められる。事故が起こる可能性を未然に摘み取ること、これが精強な部隊には求められる。

今年4月、急患空輸で災害派遣中の陸自へりが徳之島の天城岳に墜落し、尊い4人の人命が失われた。悪天候下の実任務とは言え、悲痛の極みである。離陸前から悪天候は予報されていた。離陸前に「天城岳の標高は1749フィートだから、気をつけようぜ」と誰かが声を掛けていれば、何事も無く任務を終えていたかもしれない。「念のための一言」、「お節介の一言」が人命を救うこともある。その一言は英雄に勝る。

孫子は言う。「よく戦うものの勝つや、智名なく勇功なし」と。真に精強な部隊は目立った英雄がいるわけではなく、派手なパフォーマンスがあるわけでもない。誠実に黙々と任務を遂行する真面目な隊員がいるだけである。事故の要因を未然に摘み取ることのできる部隊、これが我々の追求すべき方向性だ。

2 事故は不連続点で起こる

事故の可能性を未然に摘み取るには、事故が何時起こるかが判れば対処できる。一つのヒントがある。以前にも投稿したことがあるが、事故は「不連続点」で起こりやすい。「不連続点」とは何か。物事には「動」と「静」、「生」と「死」、「天」と「地」、「陰」と「陽」といった両極がある。その接際部が不連続点である。

例えば、寒気団と暖気団の接際部、これが前線であり不連続点だ。前線では風雨や雹、落雷、突風等の被害が起きやすい。航空機事故の大半は離着陸時に生じている。「地上」と「空中」の不連続点だからだ。交通事故の多くは交差点で起きる。交差点は「動」と「静」、「直」と「曲」の不連続点だ。指揮官交代時期はまさに不連続点だ。統計的に見ても事故

が多発している。季節の変わり目は病気に罹りやすく、自殺者も多い。人生の不連続点は「結婚」、「出産」、「転勤、転職」、「子供の入学」、「親の死」等々がある。これら不連続点では情緒が不安定になりやすいのか、事故の発生率が高い。演習等での事故も、演習中よりむしろ演習開始直後や終了時に起きやすいのは、それが不連続点だからだ。バイオリズムも「正」と「負」の交差する不連続点が要注意と示唆する。

春の異動時期はその典型だ。複数の不連続点が重なっている。季節の変わり目、指揮官異動、年度末、部隊改編、子供の卒業、入学等々、不連続点のオンパレードだ。前述の陸自ヘリ事故も残念ながら同時期に発生した。

もちろん異動時期だけではない。部隊によって、個人によって、それぞれが持つ不連続点は千差万別だ。要は部隊の不連続点を指揮官が看破し、自分の不連続点を自分自身が自覚し、その不連続点で身構えることが大切なのだ。

3 事故を待ち伏せろ

不連続点で事故が起きやすいのであれば、その不連続点に安全対策を集中すればいい。指揮官の手腕の見せ所だ。部隊の不連続点を見抜けるかどうか、指揮官の軽重が問われる。

「敵を知り、己を知る」のは戦の原点である。部隊の不連続点を看破し、そこに隊員達の注意力を集中させる。言わば「事故の待ち伏せ」だ。事故というものは賢い。待ち伏せたところには決して出現しない。これで未然防止が可能になる。事故の待ち伏せが安全確保の要諦なのだ。

事故の未然防止は「戦」である。「戦」に勝つには勝機を看破し、戦力を集中するのが原則だ。「注意しろ、注意しろ」と何とかの一つ覚えのように絶えず叫んでいる愚かな指揮官がいる。これは「注意するな」と言っているに等しい。人間の注意力は有限であり、持続力に限界がある。限りあるが故に戦機に投じ、注意力を集中しなければならない。指揮官の器量が試されているのだ。所要に満たない戦力の逐次投入、これは厳に慎まねばならぬ。

隊員が注意力を集中し、事故防止意識のベクトルがそろっているときは、事故は起きない。各種戦技競技会の時がそうだ。戦技競技会での事故はあまり聞いたことがない。隊員の注意力と意識のベクトルがそろっているからだ。正月明けの飛行初め、これは不連続点に違いない。だがこの時も事故はほとんど起きない。休暇明けのフライトということで、整備員、パイロットが共に「注意しなければ」との思いを共有し、身構えているからだ。無意識のうちに事故を待ち伏せしているのだ。

隊員達のベクトルがバラバラで不連続点重なるとき、この時こそ指揮官の出番だ。「お節介の一言」「念のための一言」は欠かせない。叱咤激励や厳しい叱責、愛の鞭が必要になる時もある。緩急軽重を判断し、任務の優先順位を明示することも重要だ。状況によっては訓練中止の決断も必要だろう。徹底して事故を待ち伏せするのだ。

4 無事故調査のすすめ

事故が未然に防止された時、何事もなかったかのように任務は継続される。実は誰かの涙ぐましい努力で事故が防止されたのかも知れないが、この努力は決して脚光を浴びることではない。無事故は誰も注目もしない。当然、その教訓を得ることは難しい。

何かが事故を防止しているのだが、何事もないことは当然視される。無事故の教訓は見過ごされるのが世の常だ。事故が起きると事故調査が実施され、事故教訓が得らる。だが、無事故の教訓は把握しにくい。先輩から後輩へ伝えることはもっと難しい。効率化や合理化の美名のもと、無事故の教訓を無意識のうちに切り捨てられることも多い。そのうち無事故の教訓は忘去され、事故がまた繰り返されることになる。

事故は時と共に風化する。事故の教訓は時間経過とともに忘れられる。また無事故が続くと何故無事故なのか顧みられなくなるのも現実だ。だが無事故教訓の把握こそが事故の未然防止の要諦なのだ。事故の教訓は個別的、特殊的であり、異なる事故には適用できないことが多い。例えば、空中衝突事故の教訓は水難事故防止には適用できない。だが、無事故の教訓は普遍的、共通的である。多くの事故形態に共通して適用できる。事故が起こる度に教訓を得ていても、モグラ叩きになるだけで事故の未然防止には繋がりにくい。無事故の教訓の把握、継続こそ努力すべき方向なのだ。

問題は無事故の教訓が把握しにくいことにある。無事故が続いている時こそ、無事故調査を実施し、無事故教訓を洗い出すことが必要だ。何故今まで事故が起きなかったのか、何が良かったのか、隠れた英雄は誰だったのか、自分の足下を静かに振り返ってみる。無事故が続いている部隊こそ隊員全員で無事故調査を実施し、考えられる教訓を洗い出してみる。そして改めて全隊員がこの教訓を胸に留め、意識して継続していく。無事故調査こそ事故の未然防止の特効薬である。

5 最後に

我々には英雄はいらない。不連続点を看破し、隊員のベクトルを集約できる指揮官と愚直に事故の芽を事前に摘み取ることのできる隊員一人一人が必要なのだ。そこには際立った功績や派手なパフォーマンスは無い。何故かその部隊には事故は起きない、といった部隊が真に精強な部隊なのだ。

これは事故の未然防止に限らない。「戦」にも共通している。「よく戦うものの勝つや、智名なく勇功なし」というがごとしだ。日露戦争における連合艦隊参謀秋山真之中佐が起草した日本海海戦に関する帝国議会報告の一部を紹介しておこう。

「完全無欠に実施された戦術は、ほとんど無臭無味で、戦術論議のタネもなく、戦況に光彩もなく、また誰に大功績があるかも判らず、しかも全軍が一様に最大の戦闘力を発揮し、全局にわたって大功をおさめ、戦果の獲得が最大なものである。」

やはり精強な部隊は「英雄」と「事故」には無縁なのだ。